

令和 2 年 6 月 5 日現在

機関番号：32634

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K03578

研究課題名(和文) 経済危機におけるマクロ経済政策の理論と思想

研究課題名(英文) Theory and Thought of Macroeconomic Policy in Economic Crisis

研究代表者

野口 旭 (Noguchi, Asahi)

専修大学・経済学部・教授

研究者番号：00208315

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：多くの民主主義社会では、経済政策の多くは、多数の有権者による公共的な選択の結果として実現される。したがって、経済政策形成のメカニズムを考察するためには、一般社会において広く共有されているような思惟、すなわち「社会的認識モデル」とは何かを明確にすることが必要である。他方で、専門家の世界においても、ある経済政策の是非についての判断は、決して一様ではない。それは、経済政策は本質的に、特定の価値判断や世界観を前提とせざるを得ないからである。それが、本研究が提起する「政策生成プログラム」であり、その競合である。古典的自由主義とケインズ主義は、その意味での異なった政策生成プログラムである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

望ましい経済政策を社会で実現させるためには何が必要なのかを明らかにした。そのためにはまず、専門知と世間知の乖離をできるだけ縮小させることが必要である。また専門家の側も、何が科学的推論であり、何が価値判断なのかを十分に明確にすることが必要である。

研究成果の概要(英文)：In many democratic societies, many of the economic policies are realized as a result of public choices made by a large number of voters. Therefore, in order to consider the mechanism of economic policy formation, it is necessary to clarify what is the kind of thinking that is widely shared in the general public, i.e., the "social cognitive model". On the other hand, even in the world of experts, judgments on the merits of certain economic policies are not uniform. This is because economic policy is inherently compelled to assume certain value judgments and worldviews. That is the "policy incubating program" that this study poses, and that is its conflict. Classical liberalism and Keynesianism are different policy programs in that sense.

研究分野：経済政策

キーワード：マクロ経済政策 非伝統的金融政策 政策生成プログラム 古典的自由主義 ケインズ主義

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

1. 研究開始当初の背景

2008年9月に生じたリーマン・ショックは、その後「百年に一度の危機」と呼ばれるほどの深刻な世界経済危機をもたらしたが、それは同時に、これまでのマクロ経済政策のあり方に大きな変化をもたらした。金融政策に関しては、主要先進国の多くが政策金利の下限に達し、量的緩和政策などの「非伝統的金融政策」に移行した。財政政策に関しては、それまで長く忘却されていたケインズの拡張財政政策が一時的に復活したが、2010年5月のギリシャ・ショックを契機として、各国において緊縮財政への急激な転換が進展した。

2. 研究の目的

本研究は、こうしたマクロ経済政策の変転と拮抗の背後にあるマクロ経済政策の理論的展開とその思想的背景を解明することを通じて、今後のマクロ経済政策運営にとっての教訓を引き出すことにあった。

3. 研究の方法

これらは、マクロ経済政策論議における現在のフロンティアであることから、各国の専門家がこれらの問題に関してどのような考えを持ち、どのような論議を行っているのかを調査することが重要である。この目的のためには、公開された論文、レポート、記事、インタビュー等に注意を払うだけでなく、場合によっては各国の専門家に直接インタビューすることも必要となる。そのようなスタイルの先行研究には、浜田宏一イェール大学名誉教授による、各国マクロ経済政策をめぐっての内外専門家へのインタビューが存在する。その浜田宏一名誉教授の研究成果は現在公刊にむけて取り纏められている。筆者はその作業の一部に、研究協力者として関与した。

4. 研究成果

本研究では以下の知見が得られたが、その多くは、以下の野口[2020]に取り纏められた。

(1)現実の経済政策がどのように形成されるのかのメカニズムを知るためには、その思想上の背景を知ることが重要である。というのは、多くの場合、経済政策の裏付けとなっているのは、ある突出した理論家や思想家による問題提起だからである。

(2)他方で、多くの民主主義社会においては、経済政策の多くは、多数の有権者による公共的な選択の結果として実現される。したがって、経済政策形成のメカニズムを考察するためには、そのような一般社会において広く共有されているような思惟、すなわち「社会的認識モデル」とは何かを明確にすることが必要である。

(3)経済政策はもちろん、政策目標に対する政策手段の有効性という点に関しては、科学的把握に基づいて行われる必要がある。そしてその領域においては、専門家の役割がきわめて大きくなる。

(4)しかしながら、この専門家の持つ「専門知」と、一般社会に幅広く流布されている「世間知」の間には、しばしば大きな溝が存在する。そのことは、政策の多くが有権者の信認を背景に行われる民主主義社会においては、現実の政策が専門知ではなく世間知に基づいて行われる可能性が存在することを示唆する。実際、そのような事態は、貿易政策などの領域ではきわめて頻繁に生じてきた。

(5)他方で、専門家の世界においても、ある経済政策の是非についての判断は、決して一様ではありえない。それは、経済政策は本質的に、特定の価値判断や世界観を前提とせざるを得ないからである。それが、本研究が提起する「政策生成プログラム」であり、その競合である。古典的自由主義とケインズ主義は、その意味での異なった政策生成プログラムである。ただし、特定の価値判断や世界観というプログラムの「中核」のまわりには、科学的な推論の束という「防備帯」が存在している。そして、その領域においては、科学的な流儀にしたがった議論や論争が展開されており、それが専門世界における「共通の知見」として蓄積されることになる。ケインズ主義の政策戦略が時代を経る中で大きく変貌を遂げてきたのは、そのためである。

(6)野口[2020]の構成は以下である。

第1部：政策形成の論理、第1章：経済政策形成の専門的文脈と社会的文脈、第2章：政策形成における既得権益と観念、第3章：経済政策論の中核と防備帯、第4章：政策プログラムとしての古典的自由主義とケインズ主義、第2部：経済政策の現実、第5章：貿易をめぐる空虚な争い、第6章：経済学と「国際競争主義」との対立、第7章：デフレをめぐる政策思潮の対立、第3部：ケインズ主義の政策戦略とその変遷、第8章：世界経済危機からみたマクロ経済学の現状、第9章：巨大な不況に対するケインズ主義の新たな対応、第10章：ケインズ主義はどのように変わっていったのか

第1部では公共選択としての経済政策形成の論理を、政策生成プログラム(policy incubating program)という概念を通じて解明した。特に、過去から現在までのマクロ経済政策を貫く二つの競合する政策思想である古典的自由主義とケインズ主義を「中核」と「防備帯」の重層構造と

して把握した。第3部では、リーマン・ショック以降の各国のマクロ経済政策の変転を念頭におきながら、ケインズ主義の防備帯にある政策戦略がどのように変転したのかを解明した。この第3部の内容の一部は、学術誌に英語論文として公表された。

<引用文献>

野口旭[2020]『経済政策形成の論理と現実』(専修大学出版局)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 野口旭	4. 巻 12月号
2. 論文標題 まずは2%インフレ目標の達成を！ 政策の優先順位を間違えな	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 別冊クライテリオン	6. 最初と最後の頁 138-143
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 野口旭	4. 巻 第70巻第1号
2. 論文標題 書評『デフレと戦う 金融政策の有効性』安達誠司・飯田泰之編著 / 日本新聞出版社刊 / 4,000円 + 税	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 週刊 金融財政事情	6. 最初と最後の頁 47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 野口 旭	4. 巻 95(50)通号4531
2. 論文標題 GDP：雇用回復で名目3%成長も	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 エコノミスト	6. 最初と最後の頁 26～27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 野口 旭	4. 巻 96(14)通号4545
2. 論文標題 出口の迷路：金融政策を問う(25)出口よりも大きな財政緊縮リスク	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 エコノミスト	6. 最初と最後の頁 76～77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 野口旭
2. 発表標題 日本におけるインフレ目標政策の評価と課題（企画：インフレターゲットを問う）
3. 学会等名 進化経済学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 野口旭
2. 発表標題 政策パラダイムとしてのケインズ主義とその変遷
3. 学会等名 ポスト・ケインズ派経済学研究会、制度的経済動学セミナー
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Asahi Noguchi
2. 発表標題 Comments for Keynes's Investment Theory as a Micro-foundation for Keynes's Grandchildren” by Sergio Nistic
3. 学会等名 12th International Keynes Conference（国際学会）
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 野口 旭	4. 発行年 2018年
2. 出版社 筑摩書房	5. 総ページ数 256
3. 書名 アベノミクスが変えた日本経済	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>増税があらゆる世代の負担を拡大させる理由 https://www.newsweekjapan.jp/noguchi/2018/12/post-20.php 財政負担問題はなぜ誤解され続けるのか https://www.newsweekjapan.jp/noguchi/2018/12/post-19.php 数十年ぶりに正常化しつつある日本の雇用 https://www.newsweekjapan.jp/noguchi/2018/08/post-18.php 世界が反緊縮を必要とする理由 https://www.newsweekjapan.jp/noguchi/2018/08/post-17.php なぜ「構造改革論」が消えたのか https://www.newsweekjapan.jp/noguchi/2018/06/post-16.php 異次元緩和からの「出口」をどう想定すべきか http://www.newsweekjapan.jp/noguchi/2017/04/post-8.php 国債が下落しても誰も困らない理由 http://www.newsweekjapan.jp/noguchi/2017/05/post-10.php 健全財政という危険な観念 http://www.newsweekjapan.jp/noguchi/2017/06/post-11.php 政府債務はどこまで将来世代の負担なのか http://www.newsweekjapan.jp/noguchi/2017/07/post-12.php 雇用が回復しても賃金が上がらない理由 http://www.newsweekjapan.jp/noguchi/2017/08/post-13.php 黒田日銀の異次元金融緩和は「失敗」したのか http://www.newsweekjapan.jp/stories/world/2016/11/post-6191.php シン・ゾーロ世界経済は崩壊するのか</p>
--

6. 研究組織			
	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考